

卒業生へ

卒業生、修了生の皆さんへ

大学院地域文化研究科長
立石 博高



卒業生、修了生の皆さん、おめでとうございます。

学部卒業の皆さんが入学される直前の3月、ターリバーンがバーミヤーンの磨崖仏を破壊しました。そしてこの年の9月に同時多発テロが発生し、10月には米・英軍のアフガニスタン空爆が始まりました。大学院修士課程修了の皆さんが入学される直前の3月には、米・英軍のイラク攻撃が開始され、4月にバグダードが陥落してフセイン政権が崩壊しました。

これらのことを皆さんは、まだはっきりと覚えていらっしゃると思います。また、昨年12月のスマトラ沖大地震と津波のことはそれぞれ鮮明に脳裏に浮かんでくるでしょう。多感な青春時代にあって皆さんは、これらの事件に痛く心を揺り動かされたことと思います。

これから社会で活躍される皆さんにまずお願いしたいのは、世界や日本のさまざまな出来事に対する感受性を大切にして、その時々さまざまな思いをめぐらせてほしいということです。アメリカはテロとの闘いと言うが、本当にこれ

でテロはなくなるのか。民主主義の回復を唱えるが、本当にこうしたやり方で回復するのか。大地震は自然災害だが、犠牲者がこんなに多くなったのは天災というより人災ではないのか。貧しい地域にはなぜ早期警報システムが築かれていないのか。観光による乱開発のせいで被害が大きくなったのではないのか。孤児の人身売買は誰のために行なわれているのか。

ところで今年は、日本が戦争に負けてから60年目にあたります。首相の靖国神社参拝をめぐる日中関係の緊張から思い出す人もいるでしょう。それでは、この敗戦の年の3月に日本で10万人もの死者を出した出来事をすぐに思い浮かべることができるでしょうか。B29が東京上空に飛来して下町が壊滅状態に陥った東京大空襲です。これには警戒警報など役に立ちませんでした。そして8月の広島・長崎への原爆投下では、30万人もの犠牲者が出ました。でも皆さんの多くにとって、これらのできごとは心にリアルに迫ってくるものではないかも知れません。

そこで、もうひとつ皆さんにお願いしたいのは、皆さんが体験したり実感したりした出来事をさまざまな歴史上の出来事と重ね合わせて考え、相互に比較し対照してほしいということです。そうするともっとダイナミックな構造的なものの捉え方ができると思うからです。そうした歴史的感受性をもって、皆さんが、文字通り社会の一員たる「社会人」として主体的に生きていかれること、未来に向けて羽ばたいていかれることを心より願っております。